

都道府県・指定都市番号	43	都道府県・指定都市名	熊本県	研究課題番号・校種名	2 (5) 小学校・中学校
				領域名	校種間連携
研究課題	<b>学校全体で取り組む研究課題</b> (5) 校種間の連携による教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
学校名 (園児・児童・生徒数)	やまがしりつかほくしょうがっこう 山鹿市立鹿北小学校 (126人)		学校・地域の特色及び実態等 ○鹿北小学校、鹿北中学校は隣接。 ○特別支援学級在籍児童・生徒の増加、通常学級在籍児童・生徒への個別指導の比重増加。		
	やまがしりつかほくちゅうがっこう 山鹿市立鹿北中学校 (72人)				
所在地 (電話番号)	(鹿北小) 熊本県山鹿市鹿北町四丁1469番地1 (鹿北中) 熊本県山鹿市鹿北町四丁1464番地		電話 0968-32-3334 電話 0968-32-2019		
研究内容等掲載ウェブサイト URL	<a href="http://jh.higo.ed.jp/kahokujh/">http://jh.higo.ed.jp/kahokujh/</a>				
研究のキーワード	9年間の連続した学び、小中一貫、インクルーシブ教育システム、UDの授業力向上、合理的配慮				
研究結果のポイント	○児童生徒の交流活動の日常化が進んだ。お互いが認められたり、成功体験が増えたりすることで自尊感情、自己肯定感が高まった。円滑な小中学校の接続が図られてきている。 ○様々な教育活動の実施において、9年間の学びを意識した教育活動の実践ができてきた。 ○地域との交流機会の増加、地域との接点での学びの充実・地域行事への積極的な参加、参画を通して、児童生徒の社会性、コミュニケーション力が向上してきている。 ○UD化と合理的配慮の視点に基づいた授業づくりが推進できた。今後は、更なる学力向上に向けた取組の工夫改善が必要。 ○鹿北町、鹿北小学校、鹿北中学校の現状を踏まえた上での教育課程の編成と学校間、地域との更なる連携・協働の推進が課題。 ○保小中15年間の連続した学びへの取組を始めた。今後、深化を図る。				

1 研究主題等

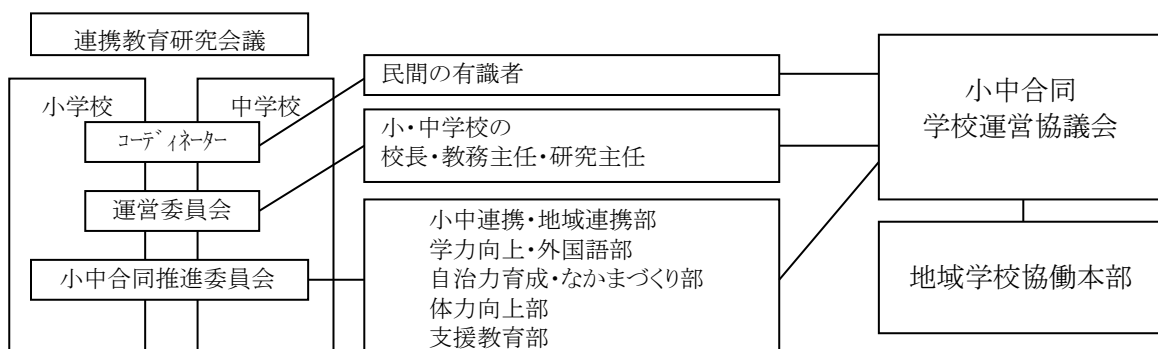
(1) 研究主題

児童・生徒の発達段階を踏まえ、9年間の連続した「学び」の確立と、インクルーシブ教育システム構築を融合させた学習指導の工夫・改善

(2) 研究主題設定の理由

- ① 特別支援学級在籍児童生徒、通常学級在籍児童生徒への個別指導の比重が確実に増加している状況を踏まえて、学習内容定着の効果を上げるための教育課程の編成及び9年間の連続した学びのための学習指導の工夫・改善を行うことは喫緊の課題となっている。そして、小・中学校が連携して、インクルーシブ教育システムの構築をさらに進め、合理的配慮の充実、UDの授業力向上等を踏まえた一貫教育体制構築に取り組むことは、児童生徒の学力向上、生きる力の育成にとって不可欠である。
- ② 鹿北町の三つの小学校は、4年前に統合し一つの小学校(鹿北小学校)となり、鹿北中学校に隣接する形でつくられた。現在、鹿北町にある一つの小学校と一つの中学校は併設型の小中一貫教育を進めるための環境が整っている。今後、教職員や児童生徒の交流や連携を深め、小学校、中学校のそれぞれの文化を理解し実践につなげることで、個々の教職員の授業力や指導力の向上を図ることができると思われる。

(3) 研究体制



鹿北の子供たちを知，徳，体の側面から育むために小中合同推進委員会の中に5つの部を設定した。各部を中心に，取組の実践を進め，実態調査で成果と課題を把握し，次の実践につなげる。P D C Aサイクルを生かして研究を進める。

(4) 2年間の主な取組

平成 28 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小中合同の学校運営協議会設置</li> <li>・研究の概要，主題，仮説，組織，年間計画案等の検討及び作成</li> <li>・2年後の目指す生徒像の具体化とそれに関する児童生徒の意識アンケート調査の作成及び7月，11月における実施とそれらの分析</li> <li>・各種行事やボランティアを通しての交流計画作成，実施（学習指導，運動会への参加など）</li> <li>・小中合同授業研究会（6／8 中学校2年生英語，10／19 小学校2年生算数）とそれぞれの学校における研究授業，授業研究会の実践</li> <li>・担当調査官訪問指導・助言（研究授業実践を含む）</li> <li>・先進校視察→小中一貫教育に向けた実践，教育課程の編成，異学年交流の年間計画，特別支援の視点での小中共通の学習過程導入，授業展開の工夫，日課表の工夫などへの取組</li> <li>・研究のまとめ作成</li> <li>・来年度の取組へ向けて（保，小，中連携カリキュラム作成，各推進委員会年間計画など）</li> </ul>
平成 29 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究の方向性についての共通理解・研究組織の決定，研究計画，各推進委員会具体的実践事項等の検討及び作成</li> <li>・児童生徒，保護者，地域の方々，運営委員会等への小中合同提案授業の公開（5/10 社会科）</li> <li>・小中合同授業研究会（6/7 小学校5年生算数，7/5 中学校1年生数学）とそれぞれの学校における研究授業，授業研究会の実践</li> <li>・学期末での実態調査，分析，次学期への取組決定</li> <li>・研究発表会（11月21日）の実施，担当調査官訪問指導，講演，今後の研究への助言</li> <li>・先進校視察→小中一貫教育に向けた実践等</li> <li>・研究のまとめ作成</li> <li>・来年度の取組へ向けて（各推進委員会での今後の志向，全体的な研究の方向性等）</li> </ul>

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

- ① 各部の目指す生徒像に関する児童生徒の実態調査実施，分析
  - ア 具体的な実践事項の検討，提案，実践
  - イ アンケート調査の実施，分析
- ② 各部を中心にした目指す生徒像に向けての具体的取組
  - ア 小中連携・地域連携部
    - (ア) 地域と学校が連携・協働して教育活動を行っていく組織づくり
    - (イ) 乗り入れ授業
  - イ 学力向上・外国語部
    - (ア) 小中共通の授業プラン（学習過程スタンダード）の導入
    - (イ) 授業づくりの視点の設定
    - (ウ) 家庭学習の充実に向けて
  - ウ 自治力育成・なかまづくり部
    - (ア) リーダー育成
    - (イ) 小中連携縦割り班の取組
  - エ 体力向上部
    - (ア) 体力向上を図るための取組
    - (イ) 交流給食を通じた児童生徒の関わり
    - (ウ) 健康促進のための取組
  - オ 支援教育部
    - (ア) 学びのUD化
    - (イ) 情報共有・啓発活動
    - (ウ) 個別の教育支援

(2) 具体的な研究活動

- ① 各部の目指す生徒像に関する児童生徒の実態調査実施，分析
  - ア 課題克服のための具体的な実践事項の検討，提案，実践  
平成28年度の実践を踏まえ，年度当初に各推進委員会で年間の具体的実践事項の作成

と計画を行った。職員全員で共有し実践してきた。

イ アンケート調査の実施、分析及び課題把握

各学期の終わりにアンケート調査を行い、分析し、成果と課題の把握を行った。それを基に、次学期での実践につなげた。

② 各部の目指す生徒像に向けての具体的取組

ア 小中連携・地域連携部

(ア) 地域と学校が連携・協働して教育活動を行っていく組織づくり

鹿北中学校校区保、小、中連携協議会を組織し、共通理解と共通実践を行っている。保、小、中連携カリキュラムを作成し、地域全体で見通しを持って子供たちを育てていけるようにしている。昨年度より、小中合同の学校運営協議会を開催し、より密接な連携ができるようにしている。

本年度、地域学校協働活動推進委員（地域コーディネーター）を選定し、地域と学校が双方向で連携・協働して教育活動を充実させる体制を整えた。

(イ) 乗り入れ授業

中学校教員による小学校への乗り入れ授業を実施した。小、中学校の日課表の調整が上手くでき、本年度は小6で4教科、小5で1教科の乗り入れ授業を実施している。

イ 学力向上・外国語部

(ア) 小中共通の授業プラン（学習過程スタンダード）の導入

9年間の連続した学びの具体的実践、授業のUD化、合理的配慮の充実を目的に全教科で共通の授業プランでの授業実践を行っている。

(イ) 授業づくりの視点の設定

授業のUD化、合理的配慮の充実のために共通の視点を4つ（学習過程の工夫、個別指導の工夫、板書の工夫、教材・教具の工夫）設定し、授業改善に努めた。

(ウ) 家庭学習の充実に向けて

小学校、中学校共に家庭学習を充実させるための家庭学習の手引き書を作成し、活用している。学年毎に家庭学習時間の目標を設定し、保護者へ周知している。

ウ 自治力育成・なかまづくり部

(ア) リーダー育成

小学校では、掃除やあいさつ運動、遊びなど日常生活を通したリーダー育成を、中学校では、それに加えて学校行事や生徒会活動を通したリーダー育成を図っている。

(イ) 小中連携縦割り班の取組

小学1年生から中学3年生までの縦割り班を編成し、縦割り班活動を行っている。より多様な人間関係の中での活動、小中の班長を中心とした計画立案と実践、課題解決場面などを意図的に設定することで、自治力の育成を図ることを目的としている。

エ 体力向上部

(ア) 体力向上を図るための取組

小中学校で児童生徒同士の交流をしながら計画的に体力・健康づくりを行うことのできる教育環境整備に取り組んでいる。小学校での中学校のトレーニングの導入、放課後の小中合同トレーニング（週2回）、部活動交流などを行っている。

(イ) 交流給食を通した他学年との関わり

中学生の配膳や食事の仕方を参考にして、小学生のスキルアップを図ったり、小学生へ配膳や食事のアドバイスをすることで中学生の自己有用感が高まったりすることをねらっている。中1ギャップの解消の意味も含め、小中の文化を交流させている。

(ウ) 健康促進のための取組

保小中合同で、メディアコントロールへの取組を継続的に行っている。小中合同学校保健委員会の開催など、健康促進のための活動を地域ぐるみで取り組むことを目指している。

オ 支援教育部

(ア) 学びのUD化

安心して学べる教育環境づくりを目指し、9年間の学びを見通した鹿北中学校校区に適したUD化チェックリストを作成した。毎月、教師自身がUD化に関する振り返りを行っている。生徒へもアンケートをとり、その内容を教師の自己評価の一つとした。

(イ) 情報共有・啓発活動

子供や子育て支援に関わる者が連携し、地域の子供や子育ての状況について情報を共有し、連携を強化することで子供の育ちをつなぎ、全ての子供の健やかな成長を見守り支える地域づくりを目指している。

### (ウ) 個別の教育支援

全ての子供たちが学校で楽しく活動でき、力を伸ばすことができるようにするため、子供の行動を分析し、支援策を検討する方法すなわち応用行動分析の考え方を使ったストラテジーシートを活用した校内ケース会議を行っている。また、個別の教育支援が必要な児童生徒への支援体制づくりに努めている。

## 3 研究の成果と課題 (○成果●課題)

児童生徒の自己評価結果 (4 している・思う 3 まあまあしている・思う 2 あまりしていない・思わない 1 していない・思わない) *一部抜粋																
質問項目	小学校 H28 11月				小学校 H29 7月				中学校 H28 11月				中学校 H29 7月			
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
① 小中を身近に感じる	13%	13%	40%	34%	6%	20%	46%	28%	5%	12%	40%	43%	5%	10%	38%	47%
② 地域でのあいさつ	2%	4%	41%	53%	3%	5%	37%	55%	0%	3%	50%	47%	2%	2%	30%	66%
③ 地域行事への参加	8%	23%	42%	27%	6%	18%	41%	35%	0%	12%	48%	40%	0%	12%	30%	58%
④ 学級で自分の思いを伝えられる	5%	13%	32%	50%	1%	19%	38%	42%	0%	20%	50%	30%	0%	14%	54%	32%

○ 「小(中)学生や小(中)学校を身近に感じますか」の問いに対して、児童生徒の肯定的な意見が少しずつではあるが増えてきている。(上表①)小中連携縦割り班の取組や合同の交流活動(交流タイム、合同トレーニング、体験行事など)を通して、一緒に活動することが日常化してきている。また、児童生徒の交流が増えたことで、中学生が小学生のために貢献したり、小学生が中学生に対して、近い将来の自分のモデルとしてあこがれをもったりすることなど、お互いのよさやがんばりが認められる機会が増えてきている。また、小さな成功体験を積み重ねることで、自尊感情や自己肯定感を高めることにつながってきている。学校生活の様子からも、小中学校の円滑な接続が進んできていることがうかがえる。

○ 9年間の学びを意識した教育活動の実践が進んできた。目指す生徒像を作成、共有したことで、9年間の意識した研究を重ねることができた。小中合同校内研修を中心に、またそれ以外でも、小中の職員が話合う機会が増えたことで教育の継続性、連続性を継承していくことの大切さを改めて意識することができた。

○ 上表②から「地域でのあいさつ」において4評価をした児童が2%、生徒が19%増加した。また、上表③から「地域行事への参加」において4評価をした児童が8%、生徒が18%増加した。地域との交流機会の増加、地域との接点での学びの充実、地域行事への積極的な参加、参画ができてきたことが大きな要因だと捉えている。上表④から「学級で自分の思いを伝えられる」において、中学校では、3、4評価をした生徒が6%増加した。これらのことから、児童生徒の社会性、コミュニケーション力が向上してきたと捉えることができる。

○ UD化と合理的配慮の視点に基づいた授業づくりを推進することができた。小中共通の授業プランを取り入れたことにより、児童生徒が見通しを持てる授業ができ、まとめ・振り返りの充実が図られてきた。また、教師の授業のUD化・合理的配慮への意識も高まり、個別指導も充実してきた。今後は、更なる学力向上に向けた取組の工夫改善が必要。

● 鹿北の現状を踏まえた上での教育課程の改善を図る。これまで取り組んできた乗り入れ授業を更に拡大するとともに、様々な教育活動において、小中が合同で行う活動の充実と継続を通して、9年間の連続した学びの確立を目指していく。小中一貫教育を目指すことが今後の目標である。

● 学校と地域との更なる連携・協働の推進を図る。総合的な学習の時間で取り組む内容を整理、再編し9年間での学び「鹿北学」を作成する予定である。中学校3年生の時に、地域のために行動できる活動を組み込み、鹿北学の集大成としたい。

● 保小中15年間の連続した学びへの取組を進める。これまで取り組んできた個別支援の充実のための関係機関との連携強化を通して、「鹿北の子どもたちは鹿北に関わるみんなで育てていく」ことが目標である。また、なかまづくりの推進、リーダー育成への取組を通して、子供たちが安心して、自立に向けしっかりと成長できる教育環境づくりに取り組んでいく。

## 4 今後の取組

- 研究体制の見直しと小中合同推進委員会の再編成
- 総合的な学習の時間で取り組む内容を整理、再編し9年間での学び「鹿北学」の実践
- 4・3・2年制を意識した教育活動の再構築(年間指導計画の作成)と実践
- 9年間の学びを意識した特別活動の全体計画・年間指導計画の作成、実践
- 自治力育成、なかまづくりを目指した特別活動の指導と評価の工夫・改善

上記の項目内容に取り組み、鹿北の全ての子供たちが、生きる力を身に付けるための教育環境及び教育システムを創造していく。